「九州ドイツ文学」第12号別冊
平成十年十一月二十五日発行

民衆本『不死身のジークフリート』

石川栄作訳

民衆本『不死身のジークフリート』

石川栄作訳

この記念すべき物語の前置き

多くの物語において読み取られるように、ブリタニアのアルトゥース王はその時代に、存命中の最も優れた円卓の騎士たちとともに立派な宮廷を司っていた。この国王によってまだ若き優れた貴族ラーデのヴィーゴライス[1]もまた騎士の位を授けられたのであったが、この騎士はその直後、まだ花盛りの年代に、ほとんど信じられないほどの素晴らしい冒険を成し遂げたのであった。すなわち、彼は巨人やほかの騎士たちを殺してしまい、数人の者には自分の意志を成し遂げて、彼らが彼によって打ち負かされたことを自ら円卓の騎士のところまで報告することを強要しただけではない。そのうえ彼は、大勢の人が関与したに違いない恐ろしい竜ピトンをも打ち殺した。さらにまた魔法をかけられた竜、あるいは悪魔の化身とも言うべきフォーラントを大変な苦労の末に打ち倒し、しまいには大魔法使いローアスをその居城で激戦の末に打ち倒して、すべての冒険を終えるとともに、タロドゥス王国全土を再びその正統な相続者、つまり、大変美しく優雅な乙女であるラーリエ姫のものとさせたのであった。彼（ヴィーゴライス）はしかもこの姫を、とても辛い努力と苦労と危険ののちに報酬として、その王国全土とともに手に入れたのであった。このようなことは詳しくヴィーゴライス氏の冒険譚において長々と喜びと楽しさをもって読み取られうるものである。以下の物語もほとんど同じようなものであり、我々はこれ以上回りくどく言わずにその物語の方へ目を向けることにしよう。

ジークハルドゥスの息子として生まれたジークフリートが両親のもとから旅に出て、その後彼の身に起こった出来事

気高き英雄で騎士のヴィーゴライス殿（この人物については前置きで紹介した）が生きていた時代に、ニーデルラントの国にジークハルドゥスという名の国王が住んでいた。国王は妃と

の間にただ一人の息子を儲けていて、その名はジークフリートといった。この息子が冒険や危険を耐え忍んだ話をこれから皆さんにお聞かせいたそう。

この少年は大きく強くなると、父母のことをまったく気にもかけずに、ただいつも、いかにしたら独自の人間、人の言うところの自由な人間になれるだろうかということだけを考えていた。そのことで両親は大変思い悩んでいた。

そこで国王が顧問官たちに相談すると、彼らが国王に進言して言うには、息子がとどまりたくないのなら、旅立たせなさい、そうすれば彼は何かを耐え忍び、ついにはあれこれよりよいことを思案するようになり、ひょっとしたらしっかりした英雄となるかも知れないということであった。国王はそれをあまり好まなかったが、ついに少年を旅立たせる決心をした。ジークフリートは父親が支度してくれるまでの時間を待つことができずに、別れも告げずに冒険の旅へと出かけて行った。彼が今やいくつかの雑木林や荒野を通って進んで行き、胃袋が空腹を感じ始めたとき、たまたまある密集した雑木林の前に一つの村が見えてきたので、彼はまさにそこへ向かって行った。すると森のすぐ前にある村のはずれには一人の鍛冶屋が住んでいたので、ジークフリートはそこへ立ち寄って、若者ないし徒弟が必要ではないかと話しかけた。ジークフリートはこのときできることなら何でもしなければならなかったのである。なぜなら、彼はほとんど二日間何も食べず、一生懸命歩き続けたので、空腹には耐えられなくなっていたのである。そのうえ彼は再び家へ帰って行くのを恥だと思い、また道程(みちのり)もあまりにも遠かったからである。ともかく彼は最大の冒険を成し遂げるには空腹にも慣れていなければならなかったのであるが、このことについてはのちにお聞かせいたそう。一方、鍛冶屋はジークフリートが勇敢で丈夫そうであるのを見て取ると、それに満足し、ジークフリートが欲しがっていた食べ物と飲み物を彼に与えた。そのときほとんど夜にもなっていたので、彼は少年を寝床につかせた。翌朝、親方はその若い徒弟を呼び、仕事場に連れて行って、少年が鍛冶仕事にふさわしいか見ようとした。そのとき少年がどのように振る舞ったか、驚くべき話をこれから皆さんにお聞かせいたそう。

ジークフリートが鉄を真っ二つに切り裂き、金敷を地面の中にめり込ませ、そのことで親方が驚いた話

さて、親方がその新しい若い徒弟を仕事につかせると、若者は物凄い力で鉄を打ちのめしたので、鉄は真っ二つに切り裂かれ、金敷はほとんど半分まで地面にめり込み、そのことで親方は大変驚き、ジークフリートの頭をつかんで、少しばかりグイと引っ張った。ジークフリートはこのようなことに慣れてはいなかった。彼は強制されるのに耐えられなかったがゆえに、最近になってようやく両親のもとを離れたのだった。それは父親の意志ではなかったが、顧問官たちがジークフリートを解き放

ちたかったので、国王にそれを勧めたのであった。今やジークフリートは親方の殴打にこれ以上耐えられなかったので、親方の襟首をつかんで地面に投げつけると、親方は長い間意識を失ったままであった。しかし意識を取り戻すと、親方は別の徒弟に助けてくれるようにと合図をした。その徒弟をもまたジークフリートは親方のように痛めつけたのであった。それゆえ親方は、いかにしたらジークフリートを再び厄介払いすることができるかと、その手段と方法を考えた。

親方が、二度と戻って来られないようにと企んで、ジークフリートを森へ行かせた話

さて、お聞きの通り、親方と徒弟はジークフリートにしたたかに打ちのめされたので、寝床に横たわらねばならないくらいであった。夜が過ぎて、朝がやってくると、親方はジークフリートを呼んで、こう言う。「わしはいま緊急に炭が必要だ。だからお前は森へ行って、袋いっぱいの炭を持って来ておくれ。森には一人の炭焼きが住んでいて、わしはいつも彼と取り引きをしているのだ」親方はしかし、森の中の菩提樹（そこへジークフリートを遣わせるのだ）のそばに棲んでいる竜に彼を殺させ、のみ込んでもらおうと思ったのである。ジークフリートは何も心配せずに森へ出かけて行った。炭を取って来るということのほかには何も考えずに。ところが彼がその菩提樹のところに来ると、見よ、恐ろしい竜が彼の方に向かって来るではないか。彼をのみ込もうとしていることは疑いない。ジークフリートはためらわずに、手が届く最初の木を地面から引き抜き、それを竜めがけて投げつけると、竜はすぐに木の大枝や小枝に尻尾をからみつかせたので、逃げられなくなった。それをジークフリートは自分に有利になるよう利用する術（すべ）を心得ていた。彼はますます木を引き抜いては、その怪獣（小さな竜を沢山連れていた）に向けて投げつけた。それから急いで炭焼き人のところに走って行き、火を持って来て、怪獣の上にかぶさっている木に火をつけると、木はすべて燃えてしまった。すると脂肪が小川のように流れ出てきた。ジークフリートは指をその脂肪の中に浸した。脂肪が冷えると、硬い皮膚となった。ジークフリートはそのことに気がつくと、衣服を脱いで丸裸になって、脂肪を身体中に塗りつけた。ただ両肩の間だけは例外であった。恐らくそこまでは手が届かなかったのであろう。まさにその箇所が、あとで皆さんもお聞きになるように、やがて彼にとっては命取りとなるのである。このような硬い皮膚のために、彼は不死身のジークフリートと呼ばれたのである。

ジークフリートがギバルドゥス王の宮廷に赴き、そこで起こった出来事

ジークフリートは自らの身体が至るところで角質になっているのを見ると、自分はこれから変身した騎士（今、言われているような騎士）になることができると思い、それゆえにそこか

ら広く知られたギバルドゥス王の宮廷へ出かけて行った。国王に迎え入れられ、誰からも親しく丁重にもてなされたので、彼はしまいには、大冒険の末ではあったが、国王の娘をも貰い受けることになるのである。

このギバルドゥス王は当時ライン河畔ヴォルムスに宮廷を構えて暮らしており、三人の息子とこのうえなく美しい一人の娘がいた。ところが、ある暑い昼間のこと、その乙女が窓辺に立って、新鮮な空気を吸おうとしていると、見よ、そこに一匹の大きな恐ろしい竜が飛んで来たではないか。館はそのためまるで火の中に包まれているかのように見えた。そして竜は美しい乙女フローリグンダを空高く、山を越えて連れ去った。竜の影は山上に四分の一マイル以上の長さにも見えたほどであった。

父と母がこのうえない心配に取り巻かれているさまが眺められたが、それは筆舌に尽くし難いものである。とりわけ母は昼も夜も泣き続けたので、すっかり目を悪くしたほどである。

さて、竜の方は乙女を竜の岩山に連れ戻ると、自分の頭を彼女の膝の上に置いて、眠り込んでしまった。竜の力は計り知れないほど大きかったので、息をするたびに竜の岩山は揺れ動いた。このように身の毛もよだつ怪獣のそばで暮らさなければならないとは、乙女がどのような気持ちだったか、今や皆さんには容易に想像がつくであろう。心の不安と嘆きのあまり彼女がそこでどのようなことを体験したかは、文字では表わせないくらいである。

この竜は、ある復活祭の日に一人の人間に変身した。そこで乙女が彼に言うには、「ご主人様、あなたは私のほかに、私の愛する父母そして親愛なる兄弟に対してなんと悪いことをしたことでしょう。あなたが私をここに連れて来てから、もう何日も経ってしまいましたので、私は心から愛する父母や兄弟に会いたいと思っています。私をそこへ連れ帰ってくださるなら、あなたとともに再びこの岩山に戻って来ることを固く誓います。あるいはほかの所へ連れて行きたければ、喜んでついて行きますわ」すると怪獣は乙女に言った。「頼んでも無駄だ。お前はもはや父母と兄弟たちに会えないばかりか、誰一人にも会えないのだから」この言葉は乙女にとって雷の一撃となって彼女の魂と心に落ちた。乙女が心配と死の恐怖に沈み込んで、一言も口に出せなくなると、彼は彼女に言った。「お前はそんなに悲痛な思いをする必要はないし、わしのことで恥だと思う必要はない。というのも、五年後の今日にはわしは再び人間に戻っているからだ。だからお前はわしとともに五年と一日待たねばならない。そしたらお前はわしの妻となるのだ。どこかへ行きたくても、お前は最後にはわしと一緒に地獄へ行かなければならないのだ。そこではほんの一日が丸一年の長さになるのだ」この恐ろしい言葉を聞くと、乙女はもう少しで気を失うところであった。彼女はまったくガタガタ震えていたのだから。心の底から真心こめて天の神に呼びかけ、神の御言葉にある誠実な約束を頼みとして、乙女は心から願って言った。せめて自分の魂（神はそれを金または銀でもってではなく、その気高い血でもって救ってくれる）だけでも守ってくださいますよう。この

ひどい牢獄から自分を救い出して解放してくれるのは、神の恵み深い意志なのだからと。さらに乙女は言った。「ああ、私がこの牢獄に閉じ込められていることを私の兄弟が知っていたら。彼らは私をここから救い出してくれるか、さもなければ命をそのために投げ出してくださることは分かっています。同様に私のやさしい父もできるだけのことをしてくださるでしょう。このうえなくかわいそうに思われるのは、私のやさしい母です。母は私と同じように、毎日その目から赤い血を流して泣いていることは分かっています」

高潔な乙女は昼も夜もこのような叫び声と痛ましい嘆き声をあげたので、たびたび力を失って気絶して倒れたほどであった。

ここで国王は、娘フローリグンダを捜すため、あらゆる国に使者を送り出す

さて、国王とその妃は十分長い間悲しみ、苦しみを味わうと、方策を考え出して、娘フローリグンダを捜させるべく、ありとあらゆる国に使者を送り出した。そこで使者が何らかの情報を手に入れたところによると、娘は竜の岩山で竜に捕らえられており、前代未聞の冒険や危険を克服した唯一の騎士以外には誰も彼女を救い出すことはできないということであった。

そうこうしているうちに、乙女が岩山に監禁されてから四年が過ぎ去った。私もまったくそう思うのだが、五年目も過ぎ去ってしまうことにでもなれば、乙女には最悪の結果となるであろう。

今やジークフリートは男らしい力を具えるに至り、熊や獅子をつかまえて、それらを木に吊して楽しみ、皆を驚かせていた。ある日のこと、ジークフリートは美しいフローリグンダの情報を得ようとして少しばかり遠くへ出かけた。そのとき狭い道で大きな熊に出くわしたが、彼は雄々しく襲いかかって、それを殺し、そのあと一番近い木に吊した。そうすることが彼の習慣だったからである。また次のようなこともあった。ギバルドゥス王が憂鬱な気分を少しでも追い払おうとして、従者を引き連れて狩りに出かけたところ、王は一行から少し離れて知らぬ間に森の中に迷い込んでしまった。王のそばには、いつも周りに仕えているジークフリート以外は誰もいなかった。そのとき一頭の大きな逞しい猪が国王めがけて突進して来た。国王はそれを槍で突き刺そうとしたが、ジークフリートが国王に先んじて、猪の頭を剣で打ち落としたので、猪は地面に倒れて死んでしまった。そのことに国王は驚いたほどである。

今やこの気高いジークフリートの賞賛は広く遠くあらゆる国へと広まっていったので、ギバルドゥス王は彼にますます好意を寄せるようになった。その後まもなくフランス王、スペイン王、イギリス王、スコットランド王及びその他の多くの王がギバルドゥス王のもとにやって来て、姫のことで王と妃を慰めた。そこで王は馬上槍試合を催すことを通達させたが、それはジークフリートがいかにそれにふさわしいかを見るためであった。この人物の賞賛がすでに遠い国にまで広まっていることを聞い

ていたので、王は彼にすべての望みをかけていたのである。こうして各人は、馬上槍試合で最もすばらしい技を見せて、賞賛を勝ち得るのは誰だろうと期待を寄せて、その定められた日を待ち受けるのであった。

ギバルドゥス王の宮廷で馬上槍試合が催され、そこでジークフリートが賞を獲得した話

さて、その定められた日が近づいてくると、各人は十分に武装装備して試合場にやって来た。そこでは馬の走路が等しく区切られていたので、誰も他人に対して有利ということもなかった。今や我々は各々の騎士について特別に述べるべきであろうが、しかしそうすればあまりにも長くなるであろう。我々はこの物語をできるだけ簡単に記述するようにしたい。そのような騎士の試合のさまを読んで楽しみたい人は、『皇帝オクターヴィアーノ』(2)、『美しきマゲローナ、または銀の鍵を持ったペーター』(3)、『白い騎士』(4)、『クリストファー殿と呼ばれたムンペルガルトの殿様』(5)、『フーゴー』(6)そしてとりわけ『騎士ポント』(7)及びそのほか多くの作品の中でそのようなものを見つけることができるので、私は読者のためにそれらを指摘しておこう。ただ述べておかねばならないのは、ここでも騎士らしく突き合いが繰り広げられたので、多くの騎士が鞍を明け渡さねばならなかったということである。しかしジークフリートは鞍の上で微動だにしなかった。そのため馬上槍試合が終わったあと彼には賞が授けられ、名誉のしるしに美しい黄金の鎖を貰ったが、そこにはとても価値ある素晴らしい宝石がちりばめられていた。居合わせた国王、領主、伯爵及び殿方たちはそれを見たので、気高いジークフリートは彼らすべての同意をもって褒め称えられ、騎士の位を授けられたのであった。その場でどのような華麗な儀式が繰り広げられたか、それを詳しく記述すべきではあるが、愛読者の皆さんには上で挙げた物語を指摘するにとどめておこう。

ジークフリートが異国の国王、領主及び殿方たちを護衛して行ったあと、さらにその後に起こった出来事

さて、気高い騎士たちが皆暇(いとま)を告げたので、騎士ジークフリートが数マイル彼らを見送って、再び戻って来てみると、ギバルドゥス王は妃のそばですっかり悲しみ沈んでいる様子であった。二人は娘フローリグンダのことを口にすると、心はそのために心配と悲しみに陥ったのである。ジークフリートはできる限り彼らを慰めて、言った。「国王様と王妃様、過度にお嘆きになるのはおやめください。親愛なる神様がお姫様をすぐに救い出してくださることと思いますから」二人は少し気分がよくなったので、夕食をとってから眠りについた。夜中にジークフリートは夢を見た。美しいフローリグンダに会った夢だったので、彼はとてもうれしくなった。夜も過ぎ去って、太陽が次

第に朝がきたことを告げると、ジークフリートは目を覚まして、起き上がり、衣服を着た。すると狩りをしてみたい気になった。そのため彼は犬を連れて、一人で出かけた。犬とともに密集した薮を取り囲むと、大胆にも姿を見せるような獣はいなかった。すると見よ、最上の猟犬のうちの一匹が薮の中に入って行ったので、ジークフリートは好奇心を抱いてそのあとを追ったところ、偶然見つけたのは竜が乙女を連れ去った足跡であった。ジークフリートは犬とともにその怪獣の足跡を、四日目に至るまで何も食べず何も飲まずに、追いかけると、ついに四日目の朝になって高い山を越えた。（ここでジークフリートは、以前述べたように、彼が初めて鍛冶屋にやって来たときよりも、はるかに空腹を耐え忍ばなければならなかった）ジークフリートはしかし自分自身のことを忘れ、ただひたすら美しいフローリグンダのことだけを考えた。彼はまた馬が疲れ始めたのに気づくと、馬から降りて、鞍をはずしてやり、少しばかり馬に草を食べさせた。カラス麦がなかったからである。そして彼自身も疲れたので、少し草の上で休息しようとした。すると見よ、思いがけず大きな獅子が薮の中からジークフリートめがけて突進して来たではないか。彼はそれに気づくと、ここで長いこと休んではおられぬと思って、（サムソン[8]のように）獅子の口を勇敢につかんで、それを二つに引き裂いたので、獅子は彼の前で倒れ死んでしまった。そこで彼は獅子をつかんで一本の木に吊すと、馬に鞍をつけ、再び馬に乗って、犬のあとを追いかけた。犬はいつも彼に道を教えてくれたのである。

武装した騎士が人通りの少ない街道でジークフリートに襲いかかったが、ジークフリートが打ち勝ってその騎士を殺したのち、さらにその後に起こった出来事

さて、ジークフリートは再び馬に乗り、まだそれほど遠くへ行かないうちに、十分に武装した騎士に出会った。騎士は言った。「若者よ、お前が何者であろうと、私はしかと言っておこう。お前は剣を交えずにここから立ち去ることはできない。お前は私の捕虜となるのだ。さもなくばお前は私の手にかかって死なねばならぬ」こう言って、鞘から剣を引き抜いた。ジークフリートはためらわずに、立派な剣をつかんで言った。「いとも勇敢な騎士よ、お前は何者であれ、男らしく防ぐがよい。そうすることが是非とも必要となろう。この人通りの少ない街道でお前はどのように勇敢な騎士を襲おうとしているのか、それをすぐに思い知らせてやるから」こうして二人は激しく打ち合ったので、火花が周りに飛び散った。そこで武装した騎士がジークフリートに言うには、「勇士よ、言っておくが、お前は降参するのだ。お前は武装もしていない。だから私には勝てやしないぞ」ジークフリートは答えた。「私の方こそお前の武器をすぐに粉々にしてやろう」そして両手で剣を握り、騎士めがけて激しい一撃を加えると、相手の面頬を打ち落とすことができた。すると騎士はジークフリートに言った。「お前はひどい目にあうぞ。これまでは手を抜いてきたのだ」こう言って激しい一撃

を加え、それでもってジークフリートの頭を二つに割ろうと思った。ところがジークフリートの方もこの一撃をすばしこく受け止め、それでもって騎士の首を打ちのめしたので、相手は馬から地面に落ちてしまった。ジークフリートはすばやく馬から飛び降りて、騎士に近づき、その傷を調べた。すると彼は傷が致命的であることを見て取って、騎士にそのような傷を与えたことを大変後悔した。彼は相手の鎧を脱がせて、新鮮な空気を吸い込ませると、相手は再び正気を取り戻すのではないかと思った。実際にこのことは大いに役立ち、騎士はなおいくらか言葉を口にすることができた。ジークフリートは言った。「さあ、言うのだ、気高い騎士よ、お前はどこから来たのか、そして名前は何というのか、そしてこのように無法にも私を襲った理由は何なのか?」騎士は答えた。「私にそれだけの力が残っていたら、すべてを話したいところだが。でも、教えてくれ、お前は誰なのか?」ジークフリートは、騎士について何か情報を得たかったので、すぐ答えて、言った。「私は不死身のジークフリートと呼ばれている者だ」騎士はこれを聞くと、言った。「気高い騎士よ、あなたでしたか。あなたの噂はよく聞いています。でも私がここにもはやとどまれないことは分かっていますので、気高いジークフリート殿よ、私の鎧と楯を受け取りなさい。あなたには是非とも必要なものとなりましょう。というのも、この森にはヴルフグラムベーアという名の大きな巨人が住んでいるからです。彼は私を無理やり捕虜としたのです。私はチリチア地方[9]の生まれで、冒険を求めて旅に出たところ、偶然この森にやって来たのです。するとこの巨人は私を打ち倒して捕虜としたのです。そして私が彼に五人の騎士を差し出したら、私を再び自由にしてやろうと言ったのです。現在のところ私は一人しか従えていませんが、今後はもう誰をも従えることはできないでしょう。気高い騎士のジークフリート殿、美しい乙女を捕らえている竜のためにこの森で繰り広げられた物凄い冒険について、私はもっと多く語りたいところですが、ああ、残念です!お別れしなければなりません」こう言って彼は息を引き取った。ジークフリートはこれを聞き、騎士がこうして突然死んでいったのを見ると、あやうく気を失うところであった。かなり長い間、彼はこれからどうしたらよいかとあれこれ考えて、その騎士の死をいたく嘆いた。「ああ、気高い騎士よ」彼は言った、「お前さんが生きていてくれたらよいのに。美しいフローリグンダにはどこで出会えるのか、お前さんの口から聞きたいのだ。しかし、ああ、残念だ!それはもはや叶わない」ジークフリートはこの騎士の武具からは楯と兜のほかには何も取らなかった。そのとき彼が言うには、「私は三日間何も食べていない。そのためとても疲れているので、鎧をすべて身につけることはできないが、私は皮膚の上に立派な鎧(角質のことだと理解願いたい)を身につけているのだ」こう言って、彼は兜を頭に被り、楯を手に取って、再び馬に跨り、竜の足跡を追ってさらに森の中に入って行った。美しいフローリグンダに出会って救い出すか、さもなくば命を落とすまでのことと考えながら。彼はしばらくそのように心配をしながら進んでいたが、竜の岩

山のすぐ近くに来ていることには気がつかなかった。馬に拍車をかけて、森から抜け出そうとしていると、見よ、エクヴァルドゥスという名の侏儒（こびと）が真っ黒な馬に乗ってやって来たではないか。金と銀で飾られて、宝石をもちりばめたこのうえなく豪華な衣裳を着ていたが、彼はそれを身につけるにふさわしかった。というのも、頭に被っていた高価な黄金の冠からも見て取れたように、彼はとても裕福な国王だったからである。

ジークフリートが侏儒エクヴァルドゥスを岩に向けて投げつけた話

さて、侏儒エクヴァルドゥス王は不死身のジークフリートを目にとめると、丁重に挨拶をした。ジークフリートもそれに対して愛想よく礼を述べたが、相手の豪華な衣裳と、とりわけこのうえない技巧を凝らした王冠には大変驚いた。さらにまた彼が従えていた随行人たち、すなわち、全員がきれいに着飾り、武装していた千人の侏儒たちにも驚いた。彼らは皆ジークフリートに仕えることを申し出た。というのも、彼のよい評判がこれらの侏儒たちの間でも鳴り響いていたからである。侏儒のエクヴァルト王[10]は、ジークフリートがどのようにして、またなぜこの場所に来たのかについては不思議に思わなかったが、特にここはとても危険だったので、この場所に一人でいる理由は何かと彼に尋ねた。ジークフリートは、自分の企てを実行に移す手段と方法を授けてくれたことに対して神に感謝の念を捧げてから、国王に対してはその美徳と誠実を授けてもらって、どうしたら最も都合よく竜の岩山に辿り着くことができるか、その手段と方法を教えてほしいと願い出た。こうして侏儒はジークフリートと話をしているうちに、その名前を呼んだので、ジークフリートは不思議に思い、侏儒に向かって言った。「君は私のことをよく知っているので、私の父と母がどういう名前であるかも知っていることは疑いないだろう」さらに続けて言った。「彼らがまだ生きているかどうか、私は知りたいのだが」侏儒は彼に答えて、言った。「君の父はジークハルドゥスという名前で、ニーデルラントの国王。母は高貴な生まれで、アーデルグンダという名前。お二人はまだご健在です」ジークフリートは侏儒がすべてのことによく精通していることを見て取ると、自分の企てがうまくゆくと思った。というのも、彼は二十四人分の力を持ち合わせていて、そのうちのわずかな力だけでも勇敢な男一人分にも匹敵したからである。そこで彼はさらに国王に、竜の岩山へ行く道を教えてくれるように頼んだ。そのためエクヴァルト王はとても驚いて、言った。「君はそのようなことを望んではいけない。前方の竜の岩山にはこのうえなく恐ろしい竜が棲んでいるのだ。竜はある国王の娘である美しい乙女を捕らえており、どんな人間も彼女を救い出すことはできない。彼女の父はギバルドゥスといい、乙女はフローリグンダという名前だ」ジークフリートは、国王の娘にどこで会えるかについてすでにある種の情報をつかんでいたので、この言葉を聞くと大変うれしくなった。そのため侏儒に向かって言っ

た。それで十分であり、自分はその美しい乙女を恐ろしい竜から救い出すこと以外にはもはや何も望んでいないと。エクヴァルドゥス王は、ジークフリートが自分の企てをやめるつもりはないことを聞き知ると、もはやここにいることはできないので、自らの意志で無事にここから立ち去ることを許してもらいたいと願い出た。ジークフリートは剣を地面に突き刺し、自分は美しい乙女を救出せずにここを立ち去るつもりはないと言いながら、三つの誓いを立てた。侏儒は言った。「たとえ君が三つの誓いを立て、世界の半分を征服したにせよ、すべては無駄で駄目な結果になりましょう。ここから立ち去らない限り、君は命を失うことになるのです」ジークフリートは言った。「ああ、エクヴァルト王よ、そのようなことはありえないし、起こりもしません。そのように脅して私にそれをやめさせようとしないで、むしろ乙女を救出するのに手助けをしてください」しかし侏儒はその冒険をとても恐れたので、そこから逃げ出そうとした。するとジークフリートは侏儒の髪をつかんで、岩壁に投げつけたので、彼の見事な王冠は粉々に壊れてしまった。そこで侏儒のエクヴァルト王が言うには、「美徳にあふれた騎士のジークフリート殿、怒りを鎮めてくれ。そして不機嫌はやめて、命を助けてくれ。私にできる限りのことを助言し、手助けいたすから」ジークフリートは言った。「なんてことだ、さあ、言うのだ！」侏儒のエクヴァルト王は言った。「ここの私たちのところにはヴルフグラムベーアという名の巨人が住んでおり、この辺りはすべて彼のものなのです。彼は千人の部下を従えており、部下は皆彼の意のままなのです。その巨人が竜の岩山へ行くための鍵を持っているのです」するとジークフリートはとても喜んで、言った。「さあ、私が乙女を助けに行って、彼女を救い出せるように、すぐその巨人に会わせてくれ。さもなければ、お前は死なねばならないぞ」そこで侏儒は岩壁のそばにある前方の山へ行く道を教えたが、その岩壁には巨人が家を構えていたのである。ジークフリートはそのようなことを聞くと、扉を叩き、巨人に出て来るよう命じた。巨人はそれを聞くや否や、怒り狂って飛び出して来た。手には鉄棒を持っていた。ジークフリートを見ると、巨人は言った。「どんな悪魔に唆されてこの森にやって来たのか。お前の足で再びここから逃げ出せるとは考えるなよ」ジークフリートは言った。「お前が美しい娘を竜の岩山に連れて来て、ひどい苦しみに陥れてから、もう四年になる。だからその乙女を私に引き渡すよう要求する。竜の岩山へ行く鍵をお前が持っていることは分かっているのだ」巨人はこの言葉を聞くと、怒りをあらわにして、鉄棒をつかんだ。それでもってジークフリートに物凄い一撃を加えると、木の枝は周りに飛び散り、鉄棒はほとんど半分まで地面にめり込んだ。しかしその一撃ははずれたため、勇士は無事であった。ジークフリートは巨人から飛び離れていたからである。

ジークフリートは竜の岩山へ行くための鍵をめぐって巨人ヴルフグラムベーアと戦う

さて、巨人は一撃がそれたのを見て取ると、ますます怒りをあらわにして、英雄めがけて激しく打ちかかり、相手を粉々に打ちのめそうとした。しかしジークフリートはすばやく三クラフターも後ろに飛び退いて、立派な剣を手に取った。そして巨人が恐ろしい一撃で鉄棒を落としている間に、ジークフリートは再び前に飛び出て、巨人に深い傷を負わせたので、血がどっと巨人の身体から流れ出た。そこで巨人は怒って言った。「若僧よ、大胆にもまた俺と戦うつもりなのか。大勢の者がこの俺を恐れるほどだから、お前は千マイルもここから離れていた方がいいだろうに。だが、そうはゆくまい。お前は命を失うことになるのだ。俺の力をお前に思い知らせてやろう」そう言って再び激しい一撃を英雄に加えると、鉄棒は地面にめり込んだ。この一撃で疑いもなくジークフリートは地面に打ちのめされるところであったが、またもやその一撃をすばやくかわしたので、傷を受けることはなかった。彼はためらわずに、またもや巨人の身体に深い傷を負わせて、自分が子供ではないことを思い知らせたので、巨人はすぐさま地面に倒れてしまった。このことで巨人は大変腹を立て、岩壁の中に逃げ込んで、できるだけ念入りに傷の手当てをした。その間ジークフリートは立ったまま、今やどうしたら乙女を救い出すことができるか、その方策を考えたのち、再び巨人の住家の扉を叩いた。巨人は相手に向かって、やめろ、すぐに出て行って、止めを刺してやろうと答えた。そうしているうちに巨人は、竜の血で丈夫にされた金箔の鎧を身につけていた。兜はこのうえなく技巧を凝らしたもので、丈夫であった。楯は良質の鋼鉄でできていて、一シューの厚さのものであった。巨人は先程とは別の鉄棒を手に持っていたが、それは四つ角がすべて鋭かったので、どんなに丈夫な鉄を打ち付けられていた車輪でも、その一撃で真っ二つに切り裂くことができるほどであった。そのうえさらに巨人は背丈と力に合わせて巧みに仕上げられていた大きな剣を脇に差していた。そうして巨人は再び岩壁の中から怒りをあらわにして飛び出して、（巨人はこれらの武器を身につけると、いつも思い切って大勢の者に立ち向かったのである）騎士ジークフリートに向かって言った。「さあ、言うのだ、小さな悪党よ、どのような悪魔に唆されてここに来たのか？俺自身の住家で俺を殺そうとするなんて」ジークフリートは言った。「何をぬかす、俺はお前にここまで出て来いと命じたのだ」「何を」巨人は言った、「お前はまだ言っているのだ？ここに来なければよかったのにと思わせてやる。お前を木に吊してやろう」「悪党よ」ジークフリートは言った、「お前は私が吊されるためにここに来たとでも思っているのか？断じて、そうではない。そんなことは神様が禁じられよう。そしてお前にしかと言っておくが、乙女を竜の岩山から救出するのに手助けしないのなら、お前の命を貰い受けるぞ。たとえお前が悪魔そのものであっても、神様の方がずっと強いのだから、神様がお前を私の手の中に引き渡してくれよう」「乙女を救出するのに手を貸せと言うのか」巨人は言った、「そういうわけにはいかない。お前は俺の強い力をまだ知らないな。すぐに教えてやろう、お前は女を欲しがってはならない

ことを」「よくしゃべる奴だな」ジークフリートは言った、「乙女を救出する手助けをするのだ。さもなければ、私が誰で、どんなことができるか、お前にもっとよく思い知らせてやろう」こうして彼ら二人は互いに激しく打ち合ったので、彼らの兜と楯からは激しく火花が飛び散ったほどであった。ジークフリートは鍛冶屋の親方のもとで自分がまだ金敷を叩いているような気がして、まるでその大きな巨人を地面の中にめり込ませるところであった。そのように激しく打ちのめそうとするとき、彼は相手に対してあまりにも小さすぎたので、馬に飛び乗った。そして巨人に致命傷を負わせると、相手は地面に倒れてしまった。長い戦いの末、巨人ヴルフグラムベーアは打ちのめされて、地面に伸びて倒れてしまったのである。そして巨人の身体からは血がどっと流れ出たのであった。

こうして巨人は十六ヶ所に深い傷を負って倒れたので、命乞いをし、意志に反してそのいとも勇敢な騎士に勝ちを認めねばならなかった。「それでは」彼は言った、「お前さんはきっと立派な騎士の名前をお持ちなのだろう。というのも、お前さんは小さな男で、俺には子供のように見えたのに、お前さんは俺に打ち勝ったのだから。命を助けてくれるなら、誠実のあかしにすべての武具と俺自身を差し出すことにしよう」ジークフリートは言った。「乙女フローリグンダを竜の岩山から救い出す手助けをしてくれるなら、許してやろう」巨人はそうすることを誠実に約束した。

巨人ヴルフグラムベーアがジークフリートに、乙女を岩山から救い出すのに手助けすることを誓った話

そこで巨人ヴルフグラムベーアは騎士ジークフリートに厳かな誓いを立てて、乙女を救い出す手助けをしようと言った。「それでは私も」（ジークフリートは言った）「お前の命を助けてやることにしよう」そして自らできる限り丁寧に巨人の傷の手当てをして、彼にこう言った。「お前は傷を負わずに済んでいたものを。このような戦いをする力があれば、我々は疑いもなく乙女を救出することができたのだが」

「さあ、教えてくれ」ジークフリートは言った、「竜の岩山へ行くにはどうしたら一番よいのか」「それをお教えしよう」と、不誠実な巨人（というのも、やがてお聞きになるように、彼は立てた誓いをすぐに破ったのだから）は言ってから、陰気な谷を指し示した。その谷には激しく川が流れていて、その轟きは不快な吠え声のような谺（こだま）を山と竜の岩山の間に反響させていた。彼らが今やそこにやって来ると、ジークフリートは災いを恐れることもなく、やがて美しい乙女にも、また竜にも会えることだけを待ち望んでいた。彼がそのようなことを考えて歩いていると、巨人は今こそ仕返しをする時だと思った。そしてこの誓い破りの悪党は気高い騎士に背後から物凄い一撃を与えたので、騎士は地面に倒れてしまい、鼻と口からは血が流れ出た。ジークフリートはここで卑劣な方法で受けたようなひど

いこぶしの一撃をこれまで受けたことはなかった。侏儒エクヴアルドゥスがそうしているうちにやって来て、秘策を用いてジークフリートの命を救わなかったならば、巨人は疑いもなく彼に止めを刺していたであろう。倒れている間ジークフリートは自分の上に楯を被せて、繰り返される一撃から身を守っていたが、すべての感覚を失って気絶して横たわってしまった。

侏儒がジークフリートに霧の頭巾を被せたので、その姿が巨人には見えなくなる

さて、ジークフリートはこのように自分の楯に覆われて地面に横たわっていると、そこへ侏儒がやって来て、彼に霧の頭巾を被せたので、その姿は巨人には見えなくなった。巨人はすっかり慌てふためいて走り回り、何が起こったのか分からなかった。「悪魔がお前をここから連れ去ったのか？」彼は言った、「それとも神の仕業か？最初お前は俺の前で伸びて地面に横たわっていたのに、今はもうそこにいない。なんと不思議なことか？」このことで侏儒は内心笑わないではいられなかった。そしてジークフリートを起こすと、彼のそばに腰を下ろした。ジークフリートは今や正気を取り戻して、侏儒に心の底から礼を述べた。「神様が」彼は言った、「君に報いてくださるだろう。こうしてもらう謂れもないのに、君は私に誠実を尽くしてくれたのだから」「まことに」侏儒は言った、「気高い騎士の君は神に感謝して当然でしょう。というのも、私が君を助けに来なかったら、君はもっとひどい目にあっていただろうから。そこでお願いだが、これ以上ひどいことが起こらないよう、今後はもう乙女のことを気にかけたり、苦労したりしないでください。今この霧の頭巾を被れば君は何の心配もなくここから立ち去ることができるのです」するとジークフリートは言った。「そう願っても駄目です。これまでの私の努力と苦労をすべて無駄にしてしまってよいものでしょうか？とんでもありません。私に千の命があったら、それらすべてを使うつもりで、一つたりともあとに残したりはしません」そう言って、霧の頭巾を引き剥がした。そして両手に剣を握ると、怒りをあらわにして巨人に向かって勇敢に駆け出し、その者になおも八つの深い傷を負わせた。すると巨人はとても大きな声で叫んだ。「お前は小さい男なのに、力いっぱい俺を打ちのめしたが、俺が死んだらお前はどうするのか？乙女を救い出すのに手助けをする人間はこの世に俺のほかには誰もいないのだぞ」ジークフリートは、乙女に対して抱いていた大きな愛のことを考えて、巨人を生かすことにして、言った。「さあ、ここから進むのだ。常に前を歩き、乙女のところに通ずる道を教えるのだ。さもなくば、お前の頭を打ち落としてしまうぞ。たとえ全世界が滅びようとも」

さて、巨人は騎士が真剣であるのを見て取ると、鍵を手に取って、先に立って竜の岩山まで進んで、扉を開けた。扉は地下八クラフターのところにあって閉じられていたのである。今やその扉が開け放たれると、ジークフリートはすばやく鍵を取り上げて、言った。「進むのだ、下劣で不誠実な悪党よ。乙女の

ところに通ずる道を教えるのだ。さもなくば、お前の不誠実をお前の頭で償ってもらうぞ」

こうして彼ら両人はこの恐ろしい岩山を登って行ったので、ひどく疲れ果てた。特に巨人は、傷の痛みを感じたので、できればすわり込みたいところであった。しかしジークフリートは力ずくで巨人を追い立てた。そうしているうちに気高い騎士ジークフリートは乙女を目にとめ、そのことを心から喜んだ。その乙女フローリグンダは、勇敢な騎士を見ると、うれしさのあまり泣いて、言った。「この騎士の方には何度か父のもとでお会いしたことがあるわ」そして彼を歓迎して、父、母、それに三人の兄弟はヴォルムスでどのように暮らしているか、その様子を知りたいと願った。

彼は今や簡単に、自分が四日前に出発したときには皆はまだ元気であったことを報告すると、こう言った。「美徳にあふれた姫よ、悲しむのはやめて、旅立ちの支度をしなさい。私たちはここに長くいることはできませんから」「ああ、気高い騎士よ」乙女は言った、「私はあなたのことがとても心配です。戦わないではあなたはここから私を連れ出すことはできないのです。あなたがあの恐ろしい竜に打ち勝つことができるか、とても心配ですわ。あの竜は狂暴な悪魔なのですから」「たとえ悪魔であろうとも、美徳にあふれた姫よ」ジークフリートは言った、「私のこれまでの辛い苦労やいろいろな努力をそのために無駄にしてよいものでしょうか?とんでもありません。私はあなたを救い出すか、自分の命を失うかのいずれかです。神様が私に強い力を授けてくれるよう、私と一緒に天の神様に心をこめて呼びかけてください」

乙女は、いつの日かこの恐ろしい竜から救い出されるよう、神様が騎士に強い力を授けてくださいますようにと、心をこめて神に祈った。彼女は騎士に対しても、彼が彼女のためにこのような大変な苦労と危険を引き受けてくれたことに多くの感謝の言葉を述べた。同時に彼女は、彼が自分を救い出してくれる限り、彼に誠実であることを約束したが、それも当然のことであった。ジークフリートは乙女に勇気を出すようにと命じてから、自分はほかには何も望まず、神様の御心のままに竜に打ち勝つか、さもなくば自分の命を失うかのいずれかだと言った。

すぐさま巨人ヴルフグラムベーアはジークフリートに向かって言った。「お前の前方にある岩壁を見ろ。そこでお前はとてもすばらしい剣を見つけるだろうが、その剣はこの世で最も有名な親方が技巧を凝らして作り上げたもので、竜を打ち倒すことのできる剣はそれ以外には見出されないのだ」

ジークフリートはとても好奇心を抱いて、悪企みだとも知らずに、すぐにその剣をつかんだ。すると見よ、名前を挙げる価値もない不誠実な悪党は、気高いジークフリートに向かって深い傷を負わせたではないか。そのため騎士はまさに片足で竜の岩山に立つような羽目となった。そこで勇士は怒って不実な男に駆け寄り、新たに格闘を始めると、竜の岩山はそのために揺れ動いたほどであった。乙女は手をもみ、頭の金髪を掻きむしって、神に向かって正義の人に味方してくれるようにと心から

叫んだ。そして彼女は騎士に言った。「いとも勇敢な英雄よ、あなたの命にかけて勇ましく戦い、あわれな乙女の私を救ってください。あなたがこれまで私のために耐え忍んでこられた大変な苦労のことを思い出してください」

ジークフリートは乙女がそのように嘆くのを聞くと、言った。「美しい姫よ、落ち着きなさい。心配は要りません」巨人は、このままでは悪い結果に終わるので、今こそ勝つか負けるかの瀬戸際だと思って、ほとんど失っていた力をすべて出しきって戦った。そこでジークフリートが巨人の傷口をつかんで、それを二つに引き裂くと、血が岩山から流れ落ちた。巨人は地面に倒れ込んで、震える声で、騎士に向かって、その美徳に免じて命を助けてくれるようにと切々と願った。巨人はまた自分が三度も不実を働いたことを認めた。「ごらんの通り」彼は言った、「俺はこのように力なく横たわっているのだから、お前さんはもう俺を恐れる必要はないはずだ」しかしジークフリートは、今や乙女を自分の手中に収め、竜の岩山へ行くための鍵をも手に握ったからには、そのような願いを聞き入れることはせずに、その恐ろしい巨人を竜の岩山から突き落とすと、巨人はすっかり粉々に砕け散ったのであった。

そこで乙女は笑みを浮かべ、このうえなく喜んで、神様が騎士に強い力を授けてくれたことに感謝した。騎士は喜んで乙女のところへ行き、彼女をやさしく抱き締めて、彼女に言った。「勇気を出すのです、美しい姫よ。あなたの苦しみをすぐに喜びに変えてあげるから」乙女は騎士に心から感謝し、とても感動的な言葉を口にしたが、同時にこれで事が済んだわけではないことを思い起こさせた。というのも、彼女はあの竜が騎士をもっとひどい目にあわせるのではないかと心配していたからである。「そのことなら」騎士は言った、「なんでもありません。ただ私の最大の苦しみは、この四日間何も食べていないし、何も飲んでいない、おまけにほとんど休んでもいないということだけです」

侏儒エクヴァルトはこの言葉を聞くと、乙女とともに大変驚き、走って行って、英雄に食べ物を持って来るようにと言いつけた。そして彼はまた、英雄とその美しい乙女には少なくとも十四日間食べ物と飲み物を差し出して、彼の兄弟や多くの仲間とともに仕え、給仕することを申し出たのであった。

ジークフリートは、空腹を癒(いや)して元気を回復するため、乙女とともに食卓につくが、見よ、そこへ竜が七匹の小竜を連れて飛んで来たではないか

さて、急いで準備されるだけのすべての食事が運び込まれると、ジークフリートは乙女とともに食卓について、食事をとって再び力を取り戻そうとした。ところが彼らがまだ口にしないうちに、見よ、そこへ恐ろしい竜が山を越えてこちらに飛んで来たではないか。七匹の小竜を連れていたので、山全体がひとかたまりになって崩れ落ちてしまいそうに揺れた。人間が恐怖

のあまり死んだとしても不思議ではなかったろう。乙女はとてもびっくりしたので、彼女の顔には心配の汗が流れ出た。食卓に仕えていた侏儒たちは皆、そこから逃げ去った。ジークフリートは手拭代わりに自分の絹布を取り出して、それで乙女の汗をやさしく拭いてやってから、彼女に言った。「美しい人よ、弱気にならないで。神様がきっと助けてくれるから」「ああ、やさしい人よ」乙女は言った、「全世界が今やあなたに味方しようとも、私たちはもう駄目です」「そんなことを神様は望んではおられません、愛しい人よ」騎士は言った、「女性はそのように言うものだが、騎士たる者はそれとはまったく違った言い方をします。神様と私があなたのそばにいる限り、心配は要りません。神様が授けてくれた私たちの命を誰が奪い取るでしょうか？」

こうして二人の恋人がこのような会話をしていると、そこへ竜がやって来て、軍旅用の槍三本分の長さの炎を吐いたので、岩山はまるで燃えているかのように熱くなった。そうしているうちに竜は物凄い飛行で岩山に衝突してきたので、岩山はひび割れがして、揺れ動き、まるでひとかたまりに崩れ落ちるかのようであった。これには岩山の麓にいたジークフリートも乙女も大変驚いてしまい、岩山が自分たちの上に落ちてきて覆ってしまうのではないかと思った。そこで彼らは、竜が疑いもなく地獄から持ってきた炎が少しでも弱まり消え去るように、この物凄い熱を避けて下の洞穴の中に逃げ込んだ。

この竜はかつて美しい若者であったが、色恋のために一人の女性に呪われて、恐ろしい悪魔が彼にとりついて、彼はその悪魔に身も心も捧げて仕えねばならなくなったのである。しかし彼は人間の理性を保持して、悪魔の力を具えていたので、五年が過ぎ去って、再び人間の姿に戻ったときに自分の妻にしようと思って、この乙女を奪い取ってきたのである。今や乙女は五年後に彼が再び人間になることを期待して暮らしていたが、悪魔そのもののように彼をとても怖がっていたので、容易に推測されるように、彼女は彼に対していつまでも好意を抱くことはできなかった。しかし竜はこの美しい乙女が奪い取られそうになったので、とても恐ろしく振る舞ったのである。竜はこの乙女をもう四年以上も養ってきたし、冬には竜の岩山の上でのとても厳しくて耐えられないほどの寒さからこの乙女を自分の熱でもって暖めてきたのである。さらに冬の期間中、（食べ物を取りに出かけるときは例外であったが）彼は洞穴の前で離れたところに横になって、乙女が辛い目にあわないように、風や霜や寒さを防いでやったのであり、こうして彼女を妻にすることができると思っていたのである。だから竜はほとんど怒りのあまり心も張り裂けんばかりであった。

ジークフリートが岩山で竜と戦う話

ジークフリートは洞穴の中でこれ以上じっとしていられなくなり、できるだけよく武装して、立派な剣――巨人が彼を欺いて倒そうと思ったときに、竜の岩山で彼に教えていたあの剣

――を手に取って、竜の岩山に登って行った。竜はジークフリートに目をとめると、信じられないほどの恐ろしい力で彼に襲いかかった。そこで戦いが行われたが、そのために岩山は揺れ動いて、崩れ落ちるかのようであった。ジークフリートは勇敢に、できるだけ巧みに身を防いだが、竜が英雄の楯をその爪で引き裂かないことを保証することはできなかった。さらに竜はひどい熱を吐き出したので、岩山はまるで鍛冶場のように見え、ジークフリートの身体全体からは汗が流れ出た。こうして両者が激しい戦いを繰り広げているときに、粗野な侏儒たちは山から森の中へ逃げることを余儀なくされた。というのも、彼らは岩山が崩れ落ちて、自分たちを皆粉々にしてしまうことを恐れたからである。

ところで、山にはエクヴァードゥスの二人の息子がいた。彼らはエクヴァルドゥスの兄弟で、父エクヴァードゥスの財宝をそこで護っていた。今や彼ら全員がそこから逃げ出すとき、彼らはその財宝を竜の岩山の下の岩壁のすぐそばにある洞穴の中に隠しておいたのである。それをのちにジークフリートが見つけるのであるが、あとでお聞きになるように、彼には何の役にも立たなかった。侏儒エクヴァルドゥスは侏儒たちが逃げ去ったことも、彼らが財宝を隠したことも知らなかった。というのも、彼は危急のときにその秘術でもってジークフリートに奉仕することができるように、身を隠してその恐ろしい戦いの成り行きを見守っていたからである。竜には侏儒たちが岩山の事情を知り尽くしていることが分かっていたので、ジークフリートが打ち負かされておれば、侏儒たちは皆死んでしまっていたであろう。

さて、ジークフリートは身体の角質がすっかり軟らかくなってきたので、竜の物凄い熱に耐えられなくなると、山の洞穴の中の乙女のところに逃げ下りた。すると角質は再び硬くなり、岩山の上のひどい熱もいくらか弱まった。そうしている間に彼は、侏儒たちが隠していた膨大な財宝を見つけた。しかし彼は、その財宝は竜が隠したもので、竜が再び人間に戻ったときにそれを再び自分のものにするつもりなのだろう、あるいはそれは自分が殺した巨人のものなのだろうと思ったが、それが侏儒エクヴァルトのものであるとは知らなかった。

そこで乙女がジークフリートに向かって言うには、竜はなおもほかに六十匹の小さな竜を引き連れているという知らせを侏儒エクヴァルトから聞いたので、自分たちはもう駄目だろうということであった。ジークフリートは、それでも自分は幸運を試してみなければならない、誰にも分からないが、危険がさし迫ったときには神様が近くにいて助けてくれよう、そして熱に耐えられなくなったら、また角質が硬くなるまで洞穴に逃げ込んで、命のある限り、再び元気を取り戻すことにしよう、と考えた。「私たち両方が死なくてはならないとしても」ジークフリートは乙女に言った、「いざ、私は騎士らしく戦うことにしよう。その間、神様があなたを護ってくださいますように。私がその恐ろしい竜に打ち勝つことができるよう、そのための力を神様が私に授けてくださいますよう、どうか私のために真

剣に祈ってください」こう言ってひざまずいて、次のように祈った。

ああ、神様、私は戦いに行きますので、
あなたのお力で私に味方してください。
戦いの際に力があれば、
私は竜から逃れられましょう。

彼はこうして祈りを終えると、さらに幸運を試そうとして、自信たっぷりと怯むこともなく再び竜の岩山に登って行った。今や竜とすべての小竜を再び目にとめると、彼は剣を両手でつかんで、竜を切り裂こうとするかのように、物凄い勢いですべての力をふりしぼって恐ろしい竜に襲いかかった。するとこの戦いで小さな竜たちはすべてそこを逃げ出して、もと来た道を引き返して行った。しかし年老いた竜はとどまり、その恐ろしい口から英雄ジークフリートめがけて青や赤の炎を大量に吐き出したので、英雄は何度か地面に倒れそうになった。さらに竜はその尻尾を巧みに使って、頻繁にそれを騎士に絡みつかせて、彼を竜の岩山から投げ落とそうとした。しかし神にすっかり身を捧げていたジークフリートは、キビキビしていてすばしこく、その尻尾の絡みつきから空高く飛び出した。そして怪獣の尻尾を切り落とそうとした。彼は剣を勇ましくつかむと、竜の尻尾に確かな手応えの厳しい一撃を加えたので、尻尾はまるでくっついていなかったかのように、竜から切り離されてしまった。こうして竜は自分の尻尾が切り離されたのを見ると、騎士に向かってひどく憤慨し、炎で焼き殺そうと考えて、大量の火を吐きかけると、まるで一フーデルの炭すべてがその岩山で点火されたかのようで、そのために竜自身も、またジークフリートの角質もすべて軟らかくなった。ジークフリートは今や自分の立派な剣が竜に粘着し始めたのを見て取ると、勇気を起こして、新しい力を汲み出し、厳しくて確かな手応えの一撃を与えて、竜を真っ二つに切り裂いた。すると半分は竜の岩山から落ちてバラバラとなった。そこでジークフリートは残りの半分を手に取って、投げ捨てると、それもすっかり粉々に砕け散ったのであった。

ここでジークフリートは物凄い熱と疲れのために気絶して倒れる

さて、乙女は下の洞穴の中で竜の恐ろしい叫び声や落下の音によって、竜が打ち負かされたことを理解すると、喜び、恐怖そして驚きが混ざった気持ちで岩山を駆け登った。すると見よ、そこに彼女の救出者が大変な労苦と熱のあまり青ざめて、身体を伸ばして地面に横たわっているではないか。彼の唇は石炭のように黒く、そのために生きている気配は少しも見られなかった。乙女はそこから逃げ出そうとしたが、ひょっとしたら彼女はほかの小さな竜たちが戻って来るだろうと思ったのかも知れない。あるいは彼女は侏儒エクヴァルトに助けを求めて叫びた

かったのかも知れない。すると見よ、そこで乙女は失神して倒れてしまったではないか。侏儒エクヴァルドゥスが彼女を助けに駆けつけて来なかったならば、彼女は「きっと死んでしまっていたであろう」(11)。

さて、気高い騎士はしばらくの間理性も意識も失って横たわっていたが、再び生気が蘇り、少しばかり息をし始めた。今や彼は目を少し開けながら、ゆっくりと起き上がろうとした。しばらくの間すわったまま、辺りを見回していると、美しい乙女がそこの地面の上に横たわっているのに気づき、とても驚いてしまった。彼は立ち上がって、彼女のところに歩み寄ると、絶望のあまり彼女のそばにひざまずいて、両腕で彼女を抱きかかえ、少しでも生きている気配を感じ取れるのではないかと思って、揺り動かしたが、そのあとひどく嘆いて言うには、「ああ、天の神が哀れんでくれますよう！私はこれまでさまざまな危険に身を晒し、厳しい戦いと労苦に耐え忍んできたが、死んだ乙女以外には何もここから連れ出すことはできないのか？あなたの両親にはなんと辛いことだろうか？ああ、私がここに来たことが嘆かわしい！」

彼がこうしてしばらく嘆いていると、幸いなことにそこへ侏儒エクヴァルトが駆けつけて来た。彼は薬草を持参しており、それをジークフリートに与えたので、ジークフリートはその薬草を乙女の口の中に入れた。その瞬間から乙女は再び元気を取り戻した。彼女の生気が次第に蘇ってきたので、彼女は起き上がり、英雄ジークフリートをやさしく、しかし恥ずかしそうな態度で抱き締めたが、それは彼女にふさわしいものであった。

そこで侏儒エクヴァルトは英雄に言った。「邪悪な巨人ヴルフグラムベーアがこの山で千人以上もいた私たちを征服してしまい、私たちは彼に貢ぎ物として私たち自身の国を差し出さねばならなかったのですが、君は私たちをその義務から自由にしてくれました。それもすべて君のおかげであることを私たちは心得ているので、命のある限り、君に仕えることを申し出ましょう。私たちはライン河畔のヴォルムスまで君に随行いたしましょう。道はよく知っていますから」この言葉のためにジークフリートは彼にとても感謝した。そうこうしているうちに侏儒は、食事を一緒にするために、乙女とともに騎士を自分の山に招待した。騎士は食事を必要としていたからである。

こうしてその場所で至れり尽くせりの準備がなされて、ジークフリートは食べ物と飲み物で再び元気を取り戻した。侏儒たちはとても忙しく働き、大急ぎで成し得る限りの最上のものを運んできたのである。侏儒エクヴァルドゥスもとても忙しく立ち働き、このうえなく美しい音楽を奏でたので、皆はそれを喜んだ。食事が終わると、すぐさま菓子が金メッキされた盆に入れられて運ばれた。そして気高い騎士ジークフリートとその恋人の健康のために侏儒たちによってたっぷりと回し飲みがなされた。侏儒たちはまことに楽しく、踊ったり跳びはねたりしていたが、騎士ジークフリートは心身ともに疲れていた。というのも、彼は四日間と三夜ほとんど休んでいなかったからである。だから彼は自分とこのうえなく美しい乙女に休息を与えてくれ

るようにと頼んだのであった。侏儒エクヴァルトはこれを聞くと、騎士と美しい乙女のためにベッドをたいそう豪華に準備させた。

そうこうしているうちにジークフリートは美しいフローリグンダを自分のもとに呼び寄せて、彼女に言った。「いとも美しいフローリグンダ姫よ、話してください。恐ろしい竜のところであなたはこんなにも長い間どのようにして暮らすことができたのですか?」「いとも気高い騎士よ」乙女は言った、「ご想像の通りです。でも話してください、立派な騎士よ、あなたはどうしてこの旅に出られたのですか?そしてあなたはご自分の命を勇敢にもお賭けになるなんて、何があなたをこの危険な冒険に駆り立てたのですか?」ジークフリートは答えた。「名誉と美徳にあふれたフローリグンダ姫よ、この危険な旅と、有難いことによい結果となったこの冒険に私を唆し駆り立てたのは、美しくやさしいあなたの愛と気高い美徳以外の何物でもありません。これこそ、私があなたを救いたくて、自分の命を顧みずに、命を賭けた唯一の理由なのです」こう言うと、美しいフローリグンダの頬にはたっぷりと涙が流れ落ちた。彼女は豪華なダイヤモンドの美しい指輪を自分の手から抜き取って、それを騎士の指にはめてやった。ジークフリートもその気高い贈り物にお返しをしようと思って、黄金の鎖――それは乙女の父親の宮廷で催された馬上槍試合で彼に与えられたものであった――を自分の首から取りはずして、それを乙女の雪のように白い首にかけてやった。こうして彼ら二人の愛と誠実は確証されたのである。

こうして会話を交わしているうちに太陽はすでに山の後ろに沈み、だんだんと黒い雲が明るく輝く空を覆っていった。ジークフリートも目を閉じ始めた。美しいフローリグンダはこのさまを見て取ると、侏儒のエクヴァルト王に合図をして、騎士が休息できるように取り計らってほしいと頼んだ。こうして豪華なベッドが騎士に準備されたが、そのベッドの上には天体の運行が技巧を凝らして刺繍され織り込まれていた美しいビロードの覆いがかけられていた。ジークフリートは言った。「今まで私は星空の下で草葉の上に休み、ほとんど眠らなかったが、今やこのビロードの空の下で柔らかいベッドの中で、神様の御心により、ぐっすりと眠られることでしょう」フローリグンダにもすぐ彼のそばに離してベッドが用意された。二人は今や祈りを済ませ、神に身を委ねると、ぐっすりと朝まで眠り込んだのであった。

さて、朝が近づき始めて、太陽が次第にその光線を山の上に伸ばし始めると、美しいフローリグンダは目覚め、すばやく起き上がって、祈りをし、身を清めた。そして神様が昨夜とこれまでの生涯の間ずうっと自分を見守ってくださり、このように大きな危険からもやさしく救い出してくださったことに感謝した。それから彼女は騎士のベッドの前に行った。騎士がひどい労苦と危険を耐え忍んできたことで、彼女は彼の身が心配だったからである。騎士がまだすやすやと眠っているのを見て取ると、彼女は彼を休ませたままにして、腰を下ろし、朝の歌をと

ても愛らしく歌い始めた。そのために騎士は目覚め、長いこと眠ったことで顔色を変えた。しかしその大変な労苦と疲労のためにそれは彼には特に許されたのである。

フローリグンダは騎士が衣服を着替えられるようにと思って、少し脇に寄った。騎士は起き上がり、手と顔を洗って、祈りを捧げた。それから彼は礼儀正しく乙女フローリグンダのところに行き、彼女に挨拶してから、すぐに両親に会いたいのではないかと尋ねた。「ええ」乙女は答えた、「心からそうしたいと思っています」そこへまさに侏儒エクヴァルトがやって来て、睦まじい二人に親しく挨拶をして、よく眠れて休めたかと尋ねた。彼らは、とてもぐっすり休めたと答えた。ジークフリートは侏儒に暇を告げたいと願った。侏儒はもっと長く居てくれるように頼んだが、それをジークフリートは丁重に断った。そのあと侏儒は急いで朝食の準備をさせた。彼らが今や少し食事をとると、ジークフリートはエクヴァルト王とその二人の兄弟（彼らも同様に国王であった）に暇を告げて、美しいフローリグンダとともに旅立った。エクヴァルト王はフローリグンダにこれからの旅のために十分備え付けられた馬を贈り、騎士とフローリグンダにこれからもよろしく好意を寄せてくれるように頼んでから、できる限り彼に仕えたい旨を申し出た。三人の国王たち、つまり侏儒エクヴァルトとその兄弟たちは、ジークフリートにこう言った。「気高い騎士よ、我々の父エクヴァードゥスは苦しみのあまり死んでしまったが、君の騎士らしい手によって恐ろしい巨人ヴルフグラムベーアが打ち負かされ退治されたので、我々は君にとても感謝しています。もしそうでなかったら、我々は皆死んでしまわねばならなかったでしょう。だから我々は、巨人が竜の岩山へ行くための鍵を持っているということを君に教えたのです。我々の感謝の気持ちが分かっていただけるよう、我々は君に伴ってヴォルムスまでずうっと護衛したいと思います。そして途中で君に災いがふりかからないように、我々は百人あるいはそれ以上で君に随行したいと思います」

ジークフリートが乙女とともに旅立ち、エクヴァルト王が華麗な馬で先導し、彼らに道を教えた話

こうしてジークフリートは侏儒たちに暇を告げると、全員に家に残るように命じたが、道を教えなければならなかったエクヴァルト王は例外であった。王は喜んでそれを果たし、最も見事な馬に乗って、二人を先導した。彼らが今やかなり遠くまで進んで来たとき、ジークフリートはエクヴァルトに言った。「私は岩山で知ったのだが、君は天文学の術を心得ているようだね。そこで君にお願いだが、将来私にはどのようなことが起こるのか、教えてはくれないだろうか」「君の要求に応じたいところだが」侏儒は言った、「そのようなことをしても君には全然気に入ることにはならないのではないかと心配です」「私がそれを欲しているのだから」ジークフリートは言った、「私

がどうなろうと、君の責任ではありません」「よろしい」侏儒は言った、「では知ってほしいのだが、君は只今姫として連れ帰っている美しい奥方をほんの八年しか連れ添うことはできません。そのあと君の命は殺害によって奪われるのです。しかし君の奥方は無残にも君の死の復讐を成し遂げ、そのために多くの勇敢な英雄が命を落とさねばならないでしょう。その戦いでは最後には君の奥方にも死が与えられることでしょう」「私の死がそのように見事に復讐されるならば」ジークフリートは言った、「私もその下手人のことを知りたくありません」こう言って、エクヴァルト王に再び戻って行くようにと命じた。彼は目を泣きはらしながら、また山へと戻って行った。

そこでジークフリートは、あそこの洞穴で見つけて、忘れていた財宝のことを思い出した。そして彼は二つの考え、すなわち、以前にもすでにほのめかしておいたように、一つはそれが巨人のものであり、もう一つはそれが竜のものだという二つの考えを抱いていた。しかしそれが侏儒たちのものであるとは思いつかなかった。さもなければ、彼は財宝を持ち運びはしなかったであろう。すぐにお聞きになるように、彼はそうすることを喜びはしなかっただろうからである。

ところで、この財宝はもともとはエクヴァードゥス王のもので、この財宝の価値に値するほど膨大な財宝を所有している国王はいなかった。この財宝に起因する戦いについて、そこでどれだけ多くの騎士が打ち殺されたかを記述しようとすれば、一つの特別な物語が必要となってくるだろう。というのも、その争いから逃れて命拾いをした者は、師匠ヒルデブラントとディートリヒ・フォン・ベルン以外には誰もいなかったからである。

再び我々の物語に戻ると、ジークフリートはそのあと乙女とともに再び引き返して、そして言った。「私たちは財宝をそのままにしておきたくありません。私は命を危険に晒してあの岩山を征服したのですから。私以上にこの財宝を所有するにふさわしい人物は誰もいません」こうして財宝を手に取って、それを自分の馬に積み、馬を自分の前に駆り立てて、道を進んでいると、先日例の騎士を打ち殺したところにやって来た。そこで彼はその騎士の馬があちこち歩き回り、草を食べているのを見た。彼は少しばかり傍らの緑の中に横たわって、眠った。そして再び目が覚めると、彼は財宝を手に取って、それをその馬に移し変えた。そして彼はまた自分自身の馬に乗って、自分とローリグンダのそばにその財宝を積んだ馬を引き連れて行った。乙女は言った。「気高い騎士よ、この馬は私たちにはよく役立ちますわね」「そうです、愛しい人よ」騎士は言った、「神を信頼する人は、神に見捨てられることはないのです」あれこれと話しているうちに彼らは森を抜け出て、まもなくまた密集した藪の中に入った。その中を長いこと進まないうちに、思いがけず十三人の人殺しが現れて、彼らを取り囲んだ。そこでローリグンダは言った。「ああ、気高い騎士よ、私たちはどうなるのでしょうか?」「落ち着きなさい、愛しい人よ」ジークフリートは言った、「彼らは私たちに噛みついたりはしないから」そうしているうちにそのうちの六人が彼を取り囲んで、言

うには「俺たちにその女を渡すのだ。さもなくば、お前の命にかかわるぞ」騎士はこれに対して笑った。乙女は言った。「財宝を彼らに渡しましょう。そうしたら私たちを見逃してくれるでしょう」騎士は言った。「私は財宝のことなど気にしないが、財宝のために奴らを恐れたなどと罵られたくはありません」そうしているうちに六人の人殺しが乙女を取り囲み、最後の者が馬勒を手に取って、財宝を奪い去ろうとした。騎士は彼らが本気だとは考えていなかったが、本気であることに気がつくと、厳しい言葉でもって彼らにこう言った。「軽率な街道盗賊たちよ、どういうつもりなのか？」「まだ尋ねていやがるな」と一人が言って、激しく彼に襲いかかった。ジークフリートはぐずぐすためらわずに、あの竜を打ち殺した自分の剣を手に取って、最初の一撃できわめて気高く反抗的なほら吹き男の頭を切り落とした。もう一つの一撃で別の男の頭を歯のところに達するまで切り裂いた。そこで四人は後ろに退いた。乙女を取り囲んでいた別の六人は、これを見ると、仲間たちを助けに行こうとしたが、彼らも迎え討たれて、彼らのうちの三人がその場に倒れることとなった。財宝を積んだ馬を連れ去った者は、そのうちにかなり遠くへ逃げ去っていたが、ジークフリートは自分の立派な馬ですぐにその者に追いつき、ほとんど苦労もせずにその者を片づけた。こうして再び向きを変えて、美しいフローリグンダを待たせておいたところで彼女に会おうと思ったが、すると見よ、逃げていた人殺したちがその間に再びそこへ引き返して来て、乙女を獲物として連れ去っていたではないか。騎士はそれを見て取ると、ぐずぐずためらわずに、財宝を積んだ馬を好きな方向へと走り去らせた。そして彼は美しいフローリグンダを置き去りにしていた場所へ急いだ。馬の蹄（ひづめ）の跡を辿るためである。というのも、フローリグンダの馬は侏儒たちによって技巧を凝らして蹄を打ち付けられていたので、彼はそれをよく見分けることができたからである。彼は今や蹄に気がつくと、大急ぎでその跡を追いかけ、密集した藪の中でその人殺したちに再び出会った。彼は怒りをこめて彼らに襲いかかって、一人を除いて全員を打ち倒した。一人は沼地に逃げ込んで首までつかっていたのである。そこでジークフリートはこれ以上その男にかまっている気はなくなって、彼に向かって言った。「お前のところに誰かが来たら、彼らに言うがいい。お前が出会ったのは、美しいフローリグンダを竜の岩山から救い出した不死身のジークフリートであり、ジークフリートが十二人のお前の仲間たちをきれいに片付けたので、仲間たちの髭はもはや生えてくることはあるまいと」こう言って彼は美しいフローリグンダを連れてそこを立ち去った。戻って行くときに彼は彼女に言った。「いとも美しい人よ、この楽しみごとはいかがでしたか？」「いとも立派な騎士よ」彼女は答えた、「それが楽しみごとなら、誰が真剣にあなたと戦ったり争ったりするでしょう」そうしているうちに彼らは、争いが最初に起こった場所にやって来た。そこで乙女は騎士に尋ねて、言った。「気高い騎士よ、あなたは財宝を積んだ馬には二度と出会わなかったのですか？」「いや」騎士は言った、「いとも美しい人よ、私はその悪党に

追いついて馬を取り戻し、悪党にはもはやお金を必要としないくらいたっぷりと与えました。しかし私が再び戻って来て、いとも美しい人よ、あなたにこの場所で再会できないと、私はすぐにその裏切りに気がついて、あなたへの大きな愛のために、財宝のことなどどうでもよくなって、財宝を積んだ馬を走り去らせて、あなたの馬の蹄の方に注目したのです。蹄にはすぐに気がついたので、私はできるだけ速くそれに追いついて、いとも美しい人よ、あなたを救い出そうとしたのです。見つけ出した財宝が何でしょうか、いとも美しい人よ、あなたの方が私にはずっと大切だったのです」「あら」美しいフローリグンダは言った、「それならば私たちは、財宝を積んだ馬をまた探したりして、さらに私たちの身を危険に晒すことはやめましょう」騎士は考えた。「私は八年しか生きられないのだから、財宝は何の役に立つだろうか」こうして二人は互いにそこを去って、ライン河畔にやって来たのである。

ジークフリートと乙女フローリグンダがヴォルムスにやって来て、歓迎を受けて、二人が結婚式を挙げる話

こうしてギバルドゥス王とその妃は、娘のフローリグンダが竜の岩山から救い出されて、今や騎士ジークフリートとともに旅の途上にあって、そこからもはや遠くないところまで戻っているという知らせを受け取ると、国王はすべての気高い騎士や誉れ高い貴族を招集させて、自分の娘とその騎士にふさわしい名誉を示して、彼らのところまで出向き、華やかに出迎えさせて、やがて結婚式に出席してもらおうとした。騎士ジークフリートは自分の命を危険に晒してかくも気高く国王の娘を獲得したのだから、国王は彼にそのようなことを拒むことはできなかったのである。

二人は盛大な儀式でもって出迎えられたが、その華やかなさまは人の目にも眺められたと言われている。しかしこの華やかなさまを記述すれば、あまりにも長くなることであろう。まこと、そこにやって来たのは皇帝、国王たち、そして十五人の領主たちで、その中にはジークフリートの父であるジークハルドゥス王もいた。無数の騎士や貴族もいて、彼らは皆丁重に出迎えられ、誠実にもてなされて接待されたが、そのようなことは王宮での同じような出来事においては礼儀にかなったことであり、あるいは当然のことでもあった。この無事の帰還のために父と母がどのように大喜びしたかは、まったく容易に考えられることである。騎士ジークフリートと美しいフローリグンダは中央教会へ案内され、まこと盛大に皇帝、国王、領主、騎士や貴族たちの立ち会いのもとで、マインツの司教によって婚礼の儀が挙行されたのであった。そのようなことは華麗に、また詳細に褒めそやされうるであろうが、そうすればあまりにも長くなるであろうし、また我々には時間も暇もない。とにかく結婚式は十四日間続き、そのあとさまざまな輪突き競技、馬上槍試合、その他騎士競技に属する類いのものが催された。そのよう

なことをすべて記述することは、私の意図ではないし、そのようにして物語を長くすることも不必要である。なぜなら、そのような騎士競技は多くの物語において記述されているからである。

ただ知っておくべきことは、ジークフリートは至るところで賞賛を勝ち得たが、そのことが義兄弟である三人の国王たちにはあまり気に入らなかったということである。彼らは彼に対して密かに憎しみを抱き、こう言った。「彼は毎日指輪と楯を持ち、それでもって威張り、まるで自分一人が英雄であるかのように誇示している。そのようにして彼は国中で我々他の者を侮っている。そのことは彼には災いをもたらすことになるだろう」

しかしこの憎しみと嫉妬がついにどのようにして爆発して、実行に移されたかについては、あとでお聞かせすることにして、その前にちょっとした楽しみごとを持ち出すことにしよう。それはジークフリートの結婚式で行われた最もおどけた遊びの一つであり、まもなくお聞きになって喜ばれることであろう。

ジークフリートの結婚式に行われた気晴らしの決闘でヨルクスとツィフェレスが身命を賭けた話

我々はしかしその決闘(12)について記述する前に、まずギバルドゥス王と一人の農夫について話さなければならない。事情は次の通りである。すなわち、ギバルドゥス王はあるとき狩りに出かけて道に迷ったが、そのときヨルクスという名の農夫が夜更けに国王を助けて、正しい道を教えた。そのため国王はこの農夫に恵みを施して、彼を家畜番の頭にしてやり、こうして農夫はギバルドゥス王の宮殿とも言うべき居城のすぐそばで暮らしていたのである。このヨルクスはとても臆病で、内気な性格だったので、抜き身の剣を前にしただけで、できることなら地面の中に這って入りたいほどであった。

さて、国王の宮廷には一人の貴族がいた。彼はおどけた、抜け目のない、策略家のいたずら者で、多くの楽しみを実現させる術を心得ていた。彼は農夫ヨルクスと話をして、農夫が日頃望んでいたように、今こそ国王に奉仕する絶好の機会だと堅くしっかりと信じこませた。「ところで」彼は言った、「ここに居合わせる異国の領主たちのうちの一人は、ツィフェレスという名の兵士を引き連れているが、この兵士はとても臆病なので、エンドウの鳴子を鳴らすだけで追い払うことができるほどだ。この男との決闘に身命を賭けて挑むがよい。男はこのことを聞くと、驚き恐れてお前のところに来ることはあるまい。そうすればお前は十分な栄誉を得られるのだ。あるいは男がやって来るにしても、お前が武装しているのを見るや否や、恐怖のあまり逃げ出してしまうであろう。そしたらお前は国王のもとで重要な役職に就けるだろう。そのことを確信するのだ」農夫は説き伏せられて、その兵士を呼び出してほしいと、貴族に向かって言った。

こうして貴族は、農夫をその気にさせて勇気づけたことを悟ると、国王のもとに出かけ、そのことを明らかにして、誰も被

害を被らないように配慮をするので、この楽しみごとを許可してくださるようにと国王に頼んだ。国王は、自分の娘が何年間もひどい災難に耐え忍んできたのだから、この楽しみごとでもって娘と、またジークフリートや居合わせる殿方たちにも楽しみを与えてやろうと考えて、その貴族にそれを実行することを許可した。

そこで貴族はジークハルドゥス王のもとに出かけて、挨拶をして、賛同してほしいと頼んで言うには、喜劇に似たちょっとした楽しみごとを計画しているが、これは若い国王と王子や居合わせるすべての殿方たちには特別の娯楽になるということであった。それはどういうものかと、国王が尋ねると、貴族は答えた。「国王様もご存じの通り、わが主君の国王様はヨルクスという者をそばに従えていますが、その男はとても臆病なので、抜き身の剣を前にしただけで地面の中に這い入るほどです。私はその男を説き伏せて、国王様の兵士ツィフェレスに決闘を挑ませたのです。彼らは二人とも臆病ですから、おもしろい喜劇が起こりましょう」国王も同意を与えて、言った。「わがツィフェレスをその気にさせることができればの話だが」

貴族は国王に親しみをこめて感謝の言葉を述べて、自らツィフェレスのところに行き、その話をいろいろと詳しく飾り立てて持ち出した。そのあと彼が言うには、自分がここに来たのも、ヨルクスが翌日身命を賭けてツィフェレスに決闘を挑んでいるということを伝える以外には何の目的もないということであった。ツィフェレスはこのうえなくびっくりしたので、すっかり青ざめ、震え、吃りながら答えた。「私は彼とは何の関係もありません。彼はどうして私に決闘を挑むことになったのですか？」貴族は言った。「彼はどうであれ、とにかく彼はお前を誠実な奴だとは思っていない。お前は立派に武装して決闘場へ行くのだ。彼はそこでお前を待っているだろうから」こう言って、貴族は再び帰って行った。

国王とその家来たちは、ツィフェレスがとてもびっくりしているのを見て取ると、彼を説得して勇気づけたので、彼はついにその決闘を引き受ける決心をした。そのため彼は貴族を再び呼び出して、貴族に言った。「わが友よ、明日までよく考えてみたいと思います」こうして貴族はこの返事をもって農夫のところへ戻って行くと、農夫は相手がすぐさま承諾しなかったことを喜んだ。というのも、彼は相手がとてもびっくりしているのが理解できたので、相手は決して来ないだろうと考えたからである。

ところが、翌朝ジークハルドゥス王の家来たちはツィフェレスと話し合って、次のようなことを言った。つまり、彼がこの決闘を拒んだら、彼にとっては永遠の恥辱となろう。彼は思い切って大胆にやりさえすればよいのだ。というのも、聞くところによると、ヨルクスは臆病な奴で、抜き身の剣を見ただけでも、待てずに、すぐに逃げ出してしまうのだからと。

ツィフェレスは説得されて、朝早く農夫に使いを送って、伝えて言うには、自分は午後一時に十分な武装をして馬に乗って決闘場に現れよう、そして相手がどのような誠実な騎士に決闘

を申し込んだのかを思い知らせてやろうということであった。「信頼される兵士の私には」（彼は言った、）「粗野で不作法な農夫と決闘することはふさわしいことではないが、二度とこんなことをしたくないように思い知らせてやろう」

こうして二人は十分武装して、決められた時刻に決闘場にやって来た。これを読んでいるすべての人がご自身でそこに居合わせて、この楽しみごとをご覧になったらよかったのにと私は思うのだが。農夫のヨルクスは決闘場に来るや否や、どこの隅が逃げるのに一番よいかと、四方八方を見回したが、この決闘の場所を呪った。決闘場がよく護られているのが分かったからである。すなわち、三ヶ所で高い板でもって取り囲まれ、入口はすべて閉鎖されていたので、どの者もその中で耐え忍ばなければならなかったのである。今や兵士のツィフェレスがヨルクスを目にとめ、とても勇敢な馬に乗っているのを見ると、できることならあやうくそこから逃げ出してしまいそうになり、もうすでにヨルクスに降参してもよい気になっていた。ヨルクスの方も同じ思いであった。

そうしているうちに騎士たちは決闘場を等分に区切り、ラッパを鳴らせた。

ヨルクスの馬は今やそのラッパの音を聞くと、もはやこれ以上待つことはできなかった。なぜなら、それはジークフリートの馬で、馬上槍試合にはよく慣れていたからである。馬はこうして弓の矢のように速く走り始めた。ヨルクスはその馬を止めたいところであったが、無駄であった。馬は慣れた走路を全速力で最後まで駆け抜けたのである。そこで彼は余儀なく槍を落としてしまい、自らが落ちないように、両手で馬の首すじにしがみついていた。そうしているうちにツィフェレス側の人たちもその馬に鞭を入れたので、その馬も走り始めた。ツィフェレスはまだ時間に余裕があるうちからすでに槍を構えていた。しかし風がその槍を一方の側に吹き寄せたので、彼の槍は知らぬ間にヨルクスに触れていた。するとヨルクスはとにかくやっとのことで鞍にしがみついていただけなので、地面に落ちてしまった。そのことに気づかなかったツィフェレスは、馬を走路の端まで走らせた。

彼は今や馬の向きを変えると、ヨルクスがそこの地面の上に倒れているのを見た。そこで彼は、「今こそ敵にしかと最後の止めを刺し、馬でもって相手の頭を粉々にし、槍でもって――まだ穂先がついているのだから――突き刺す時だ」と考えた。しかし彼が相手に近づくと、ヨルクスはゆっくりと立ち上がった。彼がこうして相手のそばに来たとき、彼が乗っていた馬は倒れてしまった。原因は何なのか、彼がいつも低く構えていた槍が馬の脚の間に入ってしまったのか、それともヨルクスが立ち上がることでその馬の邪魔になったのか、これについては私は知ることはできない。何はともあれ、とにかく馬は彼とともに倒れてしまったのである。

するとヨルクスは、「今こそ敵を倒して騎士となるべき時だ」と考えて、まるで相手を粉々にしたいかのように、遠くから激しく相手に斬りかかった。

ところが、馬は両脚でひどく蹴り続けていたので、彼は相手に近づくことはできなかった。馬はついに蹴るのをやめて、自らの脚で起き上がると、脚を動かし、鼻で息をして、ひどく暴れまわったので、善良なヨルクスは馬が自分にぶつかるのではないかと心配して、そのあと怖くなってそこから逃げ去った。

その間にツィフェレスは再び立ち上がって、自分の足で立つ余裕ができた。しかし彼の身体は痛めつけられ踏みつけられていたので、怖くなって震えながら敵に降参しようと思った。そう思いながら彼は自分の剣を引き抜き、その先端をつかんでヨルクスに手渡すつもりになっていた。ところが、ヨルクスの方も同じ考えで、敵に降参するつもりになっていた。今やツィフェレスが抜き身の剣をもって、降参しようと思ってやって来ると、ヨルクスは、これはよい結果にはならずに、ひどい目にあうぞと思って、できる限りの速さで遠くへ逃げ去った。

ツィフェレスはこのことに気がつくと、自分の勝利をまだ完全にはあきらめずに、再び勇気を奮い起こして、臆病者にできる限りの力で敵を追いかけ、怒りをこめて相手に斬りかかった。相手は一撃を感じるや否や、大きな声で叫んで、やめてくれ、さもなければギバルドウス王とジークフリートに言いつけるぞと言った。しかし相手はまだやめようとしないので、彼はできるだけ遠くへ退いた。今や彼は水辺までやって来たので、これ以上退くことはできなかった。そこで彼の恐怖は二倍になった。これ以上退けば、水の中で溺れ死んでしまう、前に出れば、敵の武器にあって死んでしまうと彼は考えたが、敵に降参するのも恥ずかしく、しかと用心しておれば敵に勝つことができたのにと思った。このようないろいろな心配のために彼はすっかり絶望してしまった。

彼がやっとのことでしっかり立とうと決心したのも、ほかにしようがなかったからである。そうして彼は剣を両手でつかんで、目をしっかりと閉じて、激しく辺りを斬りまくり始めたので、ツィフェレスは驚いて逃げ出し、大きな声で叫んだ。「生かしておいてくれ、生かしておいてくれ、そうすれば私はお前に降参しよう」というのも、彼は一つの傷も受けていなかったのに、すでに多くの傷を負っていたように思い込んでいたからである。

こうしてヨルクスはその叫び声を聞くと、再び目を開け、敵が彼から遠く退いているのを見た。そこで彼は再び勇気を奮い起こして、できる限り敵を追いかけた。そこでツィフェレスはさらに大きな声で叫んだ。「命を恵んでくれ。お前に復讐しようなどとは、一生涯考えたりもしないから」「それならお前の武器を手放せ」と、ヨルクスは言った。このあわれな男は、命じられた通り、ただちに武器を手放した。

今やヨルクスは敵がすっかり武器なしであるのを見ると、何も恐れるものはなかったはずであるが、それでも信用できずに、相手に言った。「私から遠く離れて、地面に横たわるのだ」この男は再び敵の声に従い、そこから遠く走り去って、地面の上にすっかり身体を伸ばして横たわり、指一本も動かさずに、小羊のように自分の最期を待ち受けた。

そこでヨルクスは、敵を生かしておいたら自分は決して安全ではないと考えた。それから彼は、どうしたら一番よく相手に打ち勝つことができるかと考えて、自らに向かって言った。「剣をもって相手のところに行ったら、相手は起き上がって、その剣を手から奪い取るかも知れない」そのあと彼が考えたことは、剣を持たずに相手のところに行って、相手の胸の上にひざまずき、携えていた大きなナイフ（それを使って彼は雌牛を殺す習慣だったのである）でもって相手の喉をかき切ることよりもよい方法はないということであった。

彼はこうして武装着の中でナイフを探していると、審判たちは彼の企てに気づいて、間に割って入り、ヨルクスにやめるよう命じ、彼に勝利を認めて満足させた。

そのような企ては、すでに敵が打ち負かされているのだから、武器を取る者の法則には反することだからである。ヨルクスは、打ち負かしたのだから、いやいやながらではあるが敵を手から放してやった。審判たちが彼に、ツィフェレスは二度と彼に反抗することはあるまいと約束したので、彼としてはその審判たちの道理にかなった言葉に従わざるをえなかったのである。

こうしてヨルクスはツィフェレスを再び立ち上がらせ、誰と関わることになったのか、彼に一度よく考えて気をつけるようにと命じた。

これでもって二人の臆病者のこの気晴らしの決闘は終わり、それぞれの者は命が助かったことを喜んだ。これがジークフリートの結婚式で行われた最もおもしろい催し物の一つであった。このようなものはもっと多く紹介されうるであろうが、それはあまりにも長すぎることになるので、これで打ち切ることにいたそう。

ジークフリートが美しいフローリグンダと暮らして、ついに宿命の日がきて命を失った話

こうして結婚式と騎士たちの競技もすべて終わると、各々の者は再び故国へと帰って行った。その際ジークフリートは彼らに安全で十分な護衛をつけたので、人は何の危険もなく頭に黄金を戴くことができたほどであった。

ところが、三人の義兄弟、つまりフローリグンダの実の兄弟であるエーレンベルトゥス、ハーゲンヴァルトそしてヴァルベルトゥスはジークフリートに敵意を抱いた。ジークフリートは馬上槍試合で彼らに先んじて賞を獲得し、そのため高く評価され賞賛されていたからである。彼らは密かに彼を殺害する方法を画策した。しかし八年が過ぎ去るまでその機会を見つけることはできなかった。これは、我々がすでに聞いているように、侏儒エクヴァルトがジークフリートに予言していたことである。

ジークフリートは美しいフローリグンダとともに平和と安らぎの中で暮らし、彼女との間に一人の息子を儲け、レープハルドゥスと名づけた。この息子がサルタンやバビロニア国王との戦いで何を成し遂げたか、また彼がどのように大きな冒険や危険を耐え忍んだか、そしてしまいにはいかにしてシチリア王の

［娘］(13)を勝ち得たか、これらについてはほかのところで記述されている。

さて、彼らが八年間堂々と平和のうちに暮らした頃のある日のこと、ジークフリートとその義兄弟たちは一緒に狩りに出かけた。ジークフリートは狩りがとても好きだったのである。ところが、その日はとても暑く、ジークフリートの身体も大変熱くなっていたので、オッカーヴァルト(14)の泉のところに行き、涼を取るためにその泉の中に顔を浸していた。そのさまを彼の義兄である残忍なハーゲンヴァルトが見て、自ら心の中で考えるには、「このような機会はいつもあるわけではない。これを逃してなるものか。今こそ敵に復讐をする絶好の時だ」彼は剣を手に取って、それをジークフリートの両肩の間に突き刺したが、そこは不死身の甲羅となっていない肉体の部分だったので、剣の先端は胸にまで達して、彼はそのためすぐさま死んでしまった。こうして誠実な英雄――その美徳、力、強さ及び男らしさはこの世でもはや見出されない――は卑劣な暗殺によってその若い命を失わなければならなかったのである。しかしその死はあとで十分な復讐が成されたのである。

今やジークフリートの妻は国王でもある主人の訃報を聞くと、大きな苦しみと悲しみのあまり重い病気に陥ってしまい、医者たちも彼女のことを心配したほどであった。そのことを彼女の父であるギバルドゥス王が聞き知ると、彼も大きな悲しみのあまり致命的な病気に陥り、そのために死んでしまわなければならなかった。悲しみのうえには悲しみが重なり、ギバルドゥス王の妃も同様に病床に臥してしまい、四日熱のために死んでしまった。美しいフローリグンダもまた悲しみのあまり死んでいたとしても、不思議ではなかったであろう。しかしそういうことはまだあってはならなかった。というのも、ジークフリートの死の復讐がまず成し遂げられなくてはならなかったが、そのためにはジークフリートの妻が頼みだったからである。三人の息子たちはその父母であるギバルト王(15)と妃を運んで、王者の威厳に従い、それにふさわしいように土の中に埋葬した。そのあと彼らはその国を受け継ぎ、所有しようとしたが、しかしまもなくお聞きになるように、そのようにうまくはいかなかった。

そうしているうちにジークフリートの奥方の状態は少しばかりよくなっていた。彼女はこうして十分丈夫になったと思うと、密かに息子レープハルドゥスとともにニーデルラントの舅、ジークハルドゥス王のもとに赴き、自分の苦しみを嘆きながら、国王の息子でもある愛しい夫が暗殺されたことを伝えた。ジークハルドゥス王はそのようなことを悲しみながら聞き知ると、たいそう怒り、国中の気高い騎士や天晴な貴族たちを招集させて、大急ぎで大勢の選り抜きの戦士たちを呼び集め、その軍勢でもって三人兄弟を攻めて、息子の死の復讐を誠実に成し遂げたのである。この戦争は何千人もの英雄の命を犠牲にしたが、その折に残忍なハーゲンヴァルトもまた惨めにも命を失ったのである。彼は慈悲を得ようと思って、臆病な兵士ツィフェレスに降参したが、ほかの勇敢な兵士に降参するよりはツィフェレ

スに降参した方がより安全だと思ったからである。しかしそのことはうまくはいかなかった。このツィフェレスは自分のチャンスに気がつくと、ハーゲンヴァルトが寝入ったときに、自分の剣を手に取って、相手の身体に突き刺したので、相手はすぐに死んでしまったのである。そして彼は言った。「私の慈悲深い国王のご子息ジークフリート様にお前が成したように、私もお前にその仕返しをしたのだ。お前もまた、自分が計った尺度で、計られたのだ」ほかの二人の兄弟たち、つまりエーレンベルトゥスとヴァルベルトゥスは、国と人々から追放された。ジークフリートの息子、最も若いレープハルドゥスはシチリアへの旅の途上にあって、森の中でメソメソ泣いたり嘆いたりしていたが、そのようなことについてはレープハルドゥスの物語において読み取られるであろう。

臆病なツィフェレスもまた打ち殺され、農夫のヨルクスもまたこの戦いで命を失った。さらに嘆くべきことは、美しいフローリグンダもまた息を引き取らねばならなかったということである。もしそうでなければ、ジークハルドゥス王は彼女を王妃として自分の国に迎え入れていたに違いない。そうしなければ、ほかの兄弟たちが彼女を追い出していただろうからである。ジークフリートの息子レープハルドゥスは祖父であるジークハルドゥスの宮廷にとどまり、そこでありとあらゆる神の畏敬と騎士の美徳の中で養育されて、勇敢な英雄となったが、それは彼の物語が十分に語り伝えている通りである。

終わり

訳注

(1) 民衆本『ラーデのヴィーゴライス(Wigoleis vom Rade)』(一四九三年)の主人公であり、その物語はヴィルント・フォン・グラーフェンベルクの叙事詩『ヴィーガロイス』(一二〇〇年)にまで遡る。

(2) 》Kayser Octaviano《一五三五年にヴィルヘルム・ザルツマンによってフランス語翻訳本(原典はラテン語)からドイツ語に翻案された民衆本。十九世紀まで繰り返し印刷された。

(3) 》Schöne Magelona, oder Peter mit dem silbern Schlüssel《ファイト・ヴァルベック(一四九〇―一五三四年)によって一五二七年にフランス語から翻訳された民衆本。初版は一五三五年で、十八世紀まで版を重ねた。

(4) 》Weißer Ritter《エリザベート・フォン・ナッサウ=ザールブリュッケン(一三九五―一四五六年)によってフランス語の原典から翻訳された民衆本。一五一四年に第二版が出版され、十七世紀まで印刷が続いた。

(5) 》Herr von Mumpelgart, Herr Christopher genannt《ヴァレンティン・シューマン(一五二〇―五九年以後)の『夜話集』(一五五九年)中の第二十二話で、その物語の内容は上記訳注(3)の民衆本に相当する。

(6) 》Hugo《エリザベート・フォン・ナッサウ=ザールブリュッケンによってフランス語から翻訳された民衆本。初

版は一五〇〇年、最新版は一七九四年。

(7) 》Ritter Ponto《エレオノーレ・フォン・フォアデァエスターライヒ（一四三三―八〇年）によって一四五六年にフランス語から翻訳された民衆本。現存する最古の印刷本は一四八三年版。十八世紀まで広く流布した。

(8) 旧約聖書『士師記』において描かれているイスラエルの士師。『士師記』第十四章第五―六節参照。

(9) チリチア(Cilicia)は恐らくシチリア(Sicilien)――あとでも何度か出てくる――と取り違えられたものであろう。

(10) エクヴァルドゥス(Egwaldus)は至るところでエクヴァルト(Egwald)とも呼ばれている。

(11) 一七二六年版では［　］内の文章が欠落しているが、翻訳テクストの注に従い、補って和訳しておく。

(12) 以下に語られる二人の臆病者の決闘は、英国詩人フィリップ・シドニーの小説『アーケイディア』から引用されたものと考えられている。

(13) 「娘」(Tochter)の文字が欠落しているが、翻訳テクストの注に従い、補って和訳しておく。

(14) 本来ならばオーデンの森(Odenwald)――韻文では(Ottenwaldt)――となるべきところである。オッカーはアラー河の支流で、北ハルツ地方にあったことから、民衆本の作者はブラウンシュヴァイク出身であったと推定される。

(15) ギバルドゥス王(Gibaldus)はここの一ヶ所だけではギバルト王(Gibald)と表示されている。

あとがき

本稿は十七、八世紀に流布した民衆本『不死身のジークフリート』(一七二六年版)の全訳である。底本には Wolfgang Golther (Hrsg): Das Lied vom Hürnen Seyfrid nach der Druckredaktion des 16. Jahrhunderts. Zweite Auflage. Halle a.S. Verlag von Max Niemeyer. 1911 に付録として掲載されている Das Volksbuch vom gehörnten Siegfried nach der ältesten Ausgabe(1726)を使用した。なお、訳出にあたっては Deutsche Volksbücher in drei Bänden. Erster Band. 》Historie von dem gehörnten Siegfried《 Aufbau-Verlag Berlin und Weimar. 5., überarbeitete Auflage 1992 並びに櫻井春隆訳『不死身のジークフリートのいとも麗しき物語』(国書刊行会一九八七年)を常に参照し、訳注についてもこれらに負うところが多いことを付記しておく。

民衆本『不死身のジークフリート』は正式題名を『不死身のジークフリートの素晴らしき物語――この天晴な騎士が克服した驚くべき冒険、読んで記憶にとどめる価値のある、楽しい物語』といい、十七世紀の半ば頃に成立したと推定される。現存する最古の印刷本はブラウンシュヴァイク及びライプツィヒで印刷されたこの一七二六年版であり、表紙には「フランス語からのドイツ語訳、新版」と記載されているが、これは恐らく当時の人々のフランス風好みの風潮に迎合しようとしたものであろう。この民衆本がドイツ由来のものであることは明らかであ

り、その直接の種本となったのは十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』（本誌前号に拙訳を掲載）である。両者の間には韻文から散文へ書き換えられ、登場人物名なども現代風に改められているという相違はあるものの、中で語られている物語自体は大筋においてほぼ同じと言ってよい。ただ韻文『不死身のザイフリート』において散見された矛盾、例えば、主人公の少年時代の物語と乙女救出の物語の間に存在するいわば「裂け目」などは、民衆本においては辻褄が合うように修正されており、さらにまた民衆本の作者は随所に新しいエピソードを挿入することによって、主人公ジークフリートを理路整然としたかたちで自らの物語世界へ取り入れている。それによってジークフリートの冒険はすべて乙女フローリグンダの愛を求めての行為に結びつけられることとなり、その結果この民衆本はもはや英雄文学ではなく、むしろ騎士ロマーンに数え入れられるべきであろう。このことは作品冒頭の前置きでジークフリート物語を中世の騎士叙事詩にまで遡るとされる十五世紀の民衆本『ラーデのヴィーゴライス』に関連づけていることからも明らかである。しかし、民衆本の中で語られたジークフリート物語は、厳密に言えば、単なる騎士ロマーンでないことも明らかである。特に民衆本の最後の方で新しく取り入れられているヨルクスとツィフェレスという二人の臆病者たちの決闘は騎士競技のパロディであり、騎士ロマーンが戯画化されているのである。まさにこの滑稽さが民衆本としてのこの作品の特色であり、このことについては拙稿『不死身のジークフリートの素晴らしき物語』――韻文から民衆本へ――（伊藤利男先生退官記念ドイツ文学・語学論集「ロゴスとポエジー」一九九五年）において詳述しているので、参照されたい。ともかくも民衆本『不死身のジークフリート』は、十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』とは異なって従来の悲劇性をまったく感じさせることもなく、むしろ反対にところどころで滑稽なユーモアさえ感じさせながら、いわば民衆本に特有の「読んで楽しい」タイプの物語として民衆の間に広く普及していったのである。